

地域医療を^{いだ}抱く大学

自治医科大学名誉教授
池本 卯典



自治医科大学創立50周年を心よりお慶びいたします。

沖縄県の出身で親しかった学生が、卒業式が終わって6年間を^{ねぎら}勞うと、北大東島診療所に単独勤務が心配だと呟いた。私は^{うなず}頷くだけだった。また、島根県出身の9期生山本隆医師は、初期研修を終えると、県庁に勤務し医療行政の専門職を志向した。厚生労働省にも出向するなど、将来を囑目されていたが、惜しまれながら病気で早世した。故山本医師は地域診療所の施設整備、特に診療所常勤医複数説がテーマのようだった。会う度に訴えられた。私は常に同調していた。現代医療は、まさにコペルニクスの転回、スマホで救急を要請し、ヘリコプターが対応する時代、医療階級性は無い。医薬品、医療器材の発達は、高度医療を応援している。一方、日本全国に無医村は637、国民医療費33兆円（国民衛生の動向2018～2019）常に問題視されながら改善の道は遠い。

その時代でも、診療所勤務医複数、赤字経営を改善した医師がいる。鳥取県の琴浦町赤碕診療所の所長青木哲哉医師（自治医科大学18期）と、その実弟青木智宏医師（自治医科大学20期）の活躍である。

青木哲哉医師は、平成12年（2000）に県職員として国保赤碕診療所に赴任した。設置者の町長は診療所の累積赤字2億2,000万円を告げその改善を要望した。赴任前の平成11年（1999）度における診療収入は1億1,000万円、年間患者数15,194名、レセプト件数6,546件。医師1名でその改善は至難。青木医師は、医師である青木敦美夫人の診療所勤務を町長に要望し、認められて医師2名が実現し、平成12・13年（2000・2001）を兄青木哲哉医師が、平成14・15年（2002・2003）は、診療所勤務医師のローテーションにより実弟の青木智宏医師と交替した。同時に本学21期生で、青木智宏医師の夫人青木美由紀医師（愛媛県出身）を診療所医員としての就任が認められ、常勤医2名体制は維持できた。その4年間に累積赤字は消失し、累積黒字6,000万円を計上した。琴浦町の町民は声を挙げて称賛したと伝えられている。同時に診療所の施設整備も進行し、高度医療も可能となり町民に還元されている。平成16年（2004）4月青木哲哉医師が再度診療所長に就任した。

平成16年（2004）9月、旧赤碕町と旧東伯町は合併し、現在の人口約2万人の琴浦町

は誕生した。赤碕町で開設された診療所は、その名称を残し今後の発展を期待し、診療所の法人化を計画した。

平成18年（2006）には指定管理者制度により、医療法人社団 赤碕診療所を設立し、公設民営の診療所として衣更えを行った。

初代理事長には、青木哲哉医師が就任して、着実な運営が続いている。

診療所の構成は、医師3名、看護師を含め職員10名、鳥取大学医学部附属病院との交流があり、堅実に運営されている。

診療科目としては、内科、小児科、整形外科、小外科を標榜し、近年の診療患者数は22,898人、レセプト数は9,298件、診療報酬は2億円を超え経営は安定している。

因みに、琴浦町の民間診療施設は、医院12施設、歯科医院6施設であり、協力しながら町民に対する医療に^{いそ}勤しんでいる。

^{なお}尚、兼任業務も多く、小学校2校、中学校1校の校医を担当し、琴浦町役場、その他4事業所の産業医にも就任している。さらに大山警察署の警察医として検死に携わることも少なくない。

全国の82医科大学(医学部)は、全て地域医療を実践している。自治医科大学はまさに、その旗手ともいえよう。

昭和・平成・令和、5,000人の『切磋琢磨』に地域医療の未来は明るい。